

マトホイス・シュバルツ伝

岡 下 敏

わが国の簿記史研究において、マイトホイス・シュバルツ (Matthäus Schwarz) が注目されはじめたのは、つい最近のことである。写本によるとシュバルツが1516年、1518年、1550年の3回に分けて著したとされている簿記書 *Musterbuchhaltung* は¹⁾、ペンドルフ (Balduin Penndorf) の *Geschichte der Buchhaltung in Deutschland* (1913) によって紹介され、その後ヴァイトナー (Alfred Weitnauer) によって1931年に翻刻されたが²⁾、わが国ではフッガー家 (Fugger) の研究に携わる経済史家によって、専ら取上げられてきたにすぎなかった。

1) シュバルツが簿記書の最初の部分をいつ著したかは、必ずしも明確ではない。エルビング写本の [Blatt 5 a] では、1516年、1518年、1550年とされいるが、ヤーメイは、1550年に書かれた部分以外は、「フッガー家との永く有名な関係のはじまった直後」 (Shortly after the beginning of his long and distinguished connection with the Fuggers) で、「1518年まで」 (by 1518) とも「1518年」 (in 1518) とものべている。(Basil, S. Yamey, "Fifteenth and Sixteenth Century Manuscripts on the Art of Bookkeeping," *Journal of Accounting Research*, Spring 1967, p. 53) またハートソウは、1518年だと言い切っている。(Mildred L. Hartsough, "A New Treatise on Bookkeeping under the Fuggers," *Journal of Economic and Business History*, 1932, p. 543) ペンドルフは、「1518年まで」 (im Jahre 1518 hin) としている。(Balduin Penndorf, *Geschichte der Buchhaltung in Deutschland*, 1913, Leipzig, S. 49.) これらの違いは、シュバルツ自身が *Musterbuchhaltung* の中で "ich mich hernach im 1518. Jar daruber setzet vnd mir endtlich furname dreierlag namhafftigiste vnd grundtlichiste buchhalten zumachen……" [Blatt 11 a] と記したことを、どのように解釈するかによるのである。

2) Alfred Weitnauer, *Venezianische Handel der Fugger Nach der Musterbuchhaltung des Matthäus Schwarz*, München und Leipzig, 1931, S. 174~314.

わが国における簿記史の文献においては、シュバルツが、茂木虎雄教授の著書「近代会計成立史論」にマタイス・シュバルツという名で³⁾、また白井佐敏教授の著書「複式簿記の史的考察」にマトイス・シュワルツという名で⁴⁾登場するものの、いずれもシュバルツを中心において説明がなされているわけではない。

シュバルツが注目されなかったのは、ドイツを除く諸外国においても同じである。1905年に出版されたブラウン (Richard Brown) の *History of Accounting and Accountants* (Jordan) および1933年に出版されたリトルトン (A. C. Littleton) の *Accounting Revolution to 1900* (New York) は、ともに簿記史研究の名著とされているものの、それらの索引においては、シュバルツの名前さえ見出すことができない。現在手にしうる外国文献でシュバルツの名前を見出しうるのは、前述のヴァイトナーの翻刻版とペンドルフの著書以外では、ヤーメイ (Basil S. Yamey) の *Fifteenth and Sixteenth Century Manuscripts as the Art of Bookkeeping*⁵⁾ およびハートソウ (Mildred L. Hartsough) の *A New Treatise on Bookkeeping under the Fuggers*⁶⁾ 等においてであるが、比較的多くのスペースをシュバルツにあてているハートソウの場合さえ、10頁に満たない記述にとどまっている。

内外をとわず、マトホイス・シュバルツの簿記書に関してなされた体系的な簿記史的研究は、6～7年前まではほとんどなかったとさえいえる状態であったわけである。

二

マトホイス・シュバルツは、1497年2月20日に、当時ニュールンベルグ (Nürnberg) と並ぶ南ドイツの商業中心地であったアウグスブルク (Augsburg) に生まれた。かれには男16人と女14人の兄弟姉妹があったが、そのなか

3) 茂木虎雄著、同書、34頁。

4) 白井佐敏著、同書、33及び59頁。

5), 6) 注1) 参照。

でマトホイスは10男であった。このようにかれに兄弟姉妹が多くいたのは、父親が3回結婚したためで、かれは父の2回目の妻との間に生まれた子供であった⁷⁾。

シュバルツ家は、ヨーロッパ全土に名の知れていたフッガー家 (Fugger) やヴェルザー家 (Welser) とは比較しようもないが、アウグスブルクでは名の知れた家系の1つであった。マトホイスの叔父ウルリッヒ (Ulrich Schwarz) は、かつてアウグスブルクの市長をつとめたほどで、父親はワイン商を営んでいた⁸⁾。

子供の時に、マトホイスはまず、シュッテラー (Ulrich Schütterer) なる人物のところで書き方を学ばされ、その後ある牧師からもっと多くのことを学ぶためにウルム (Ulm) の北にあるハイデンハイム (Heidenheim) へ行かされた。親もとを離れたのである。しかしかれは間もなくその地を逃じ出し、アウグスブルクへ帰ってきた。そこで今度は、アウグスブルクにあるラテン語学校に入れられた。ここでも無味乾燥な授業内容が肌に合わなかったらしく、父親もついにマトホイスに家の仕事を手伝わすことにした。かれ13歳のことである。家業の手伝をマトホイスは勉強よりも好んだようで、この時分にかれは、父親とリンドウ ((Lindau), コンスタンツ (Konstanz) へ旅行している。そして17歳のときに、イタリアへ遊学することとなるのである⁹⁾。

父親の営むワイン商が、どの程度の規模であったかは明らかでない。しかし多くの兄弟姉妹があったにもかかわらず、マトホイスに幼少のころから勉学の機会が与えられたこと、また一時父親の商売を手伝った後の17歳の時に、商業実務や計算方法という点ではドイツ商人の教師であり手本であったイタリアへ遊学することができたこと等を考えあわせると、ワイン商としての父親の商売

7) 井上清稿, シュヴァルツの簿記法(一)『会計』, 第109巻, 第6号, 138頁。

8) Günter Ogger, *Kauf dir einen Kaiser—Die Geschichte der Fugger*, München und Zürich, 1978, S. 208. なお, ウルリッヒは, マトホイスの祖父であるという説もある(井上稿, 前掲論文, 139頁)。

9) マトホイスのイタリア遊学前の様子については, Vgl. Alfred Weitnauer, a.a.O., S. 5.

は、可成り手広く営まれており、裕福でもあったと推測される。当時のドイツでラテン語を学んだのは、裕福な家の子供だけであり、ヨーロッパの文化と商業を代表していたイタリアへ、子供を遊学させるのは、大商家の慣わしであったからである。グライフ (B. Greiff) は、「名のあるアウグスブルクの商人で、ヴェニスで学んだ経験のない人を挙げることはできない」とさえのべている¹⁰⁾。

アウグスブルクからイタリアへ行くには、当然にアルプスを越えねばならなかったわけであるが、マトホイスは最初にミラノ (Mailand) を訪れた。ミラノでは、第一流の商人の家に下宿し、少しづつイタリア語の読み書きを学んだ¹¹⁾。ただ、マトホイスはイタリア遊学にあたって、はじめから特別な事柄を習得する目的をもっていたのか否か、またなぜ最初からヴェニスへ行かなかったのかは、明らかでない。当時、南ドイツ商人の子供がイタリアへ遊学する目的は、イタリア語の習得と商業の本場での商業一般についての知識の習得であったといわれていることからすると、マトホイスもはじめは、広く商業知識一般を身につけ、帰国して後は父親の家業を受継ぐつもりであったものと考えられ、最初ミラノへ行ったのも、リンドウおよびコンスタンツへ旅行した経験のあることから、道になれていたためではなかろうかと考えられるにすぎない。

そのようなかれに、遊学中に学ぶべきものをはっきりと意識させたのは、複式簿記というものの存在を知らされたことであった。もちろんマトホイスも、父親の営むワイン商を手伝っていた時に、なんらかの取引の記録方法は眼にしていたものと考えねばならない。手広くワイン商を営んでいたとすると、なんらかの取引記録はつけていたはずだからである。しかし、シュバルツ家で用いていた記録方法は複式簿記ではなかったのであろう。おそらく父親の店では、

10) B. Greiff, *Tagebuch des Lucas Rem aus den Jahren 1494—1541. Ein Beitrag zur Handelsgeschichte der Stadt Augsburg*, Augsburg, 1861, S. 13.

11) マトホイス自身は、つぎのように書いている。das erstmalen zu Mailand vnnd bey den treffenlichsten handelsleutten gewonet; vnd da ich derselbigen scribenten vnnd buchhalten in kundtschaft kam (Musterbuchhaltung, [Blatt 11 a]). Vgl. Alfred Weitnauer, a.a.O., S. 183.

マトホイスが後になってかれ自身の著書の中で述べたような、「取引を質の悪い記録簿や紙片に簡単に書き、それを壁にはったり、窓の敷居に請求書をぶらさげておく」(zeichnen ire handlungen in schlecht recordantzen vnd auf zedel, klaibens an die wänd vnd halten rechnung am fensterpret)¹²⁾とといった程度の記録保存の方法を用いていたのであろう。したがって複式簿記を知った時には、おどろきもし習得意欲をもやしたものと思われる。マトホイスが複式簿記の存在を知ったのは、最初の訪問地ミラノであった。

その時の模様を、かれはつぎのように述べている。「人々が簿記について話していたが、自分にはそれが理解できなかった。しかし、それが商人にとって有効なものであるような気がした。」(wann man von buchhalten saget, so wust ich nit wauon man redet. Als ich aber mercket, das es den kaufleuten ein nutzlich ding war.)¹³⁾ そこでかれは、その地に留まって簿記を学ぼうとしたのであるが、結局は断念せざるをえなかった。そのことについてかれは、「しかし、人々がわたくしに正しい助言を与えてくれないような不信を感じた。わたくしはミラノの町をあちこちまわってみたが、満足できる教師を見出すことができなかった。」(aber ich fand die welt vntrew, da man mir schlechte anweisung thet; Wie ich aber mein nachfrag in der stat Mailand hette, da kundt ich kain maister finden, der sufficient war)¹⁴⁾ とのべている。ミラノの商人たちは、簿記の技術を秘密にしておきたかったのであろう。

その後のマトホイスは、複式簿記を習得するための良い教師を求めて、イタリア各地を訪れることになる。その最初の訪問地はゼノア(Genua)であった。ゼノアは13・14世紀には交通の一大中心地として栄えたほどの都市であったが、そこでもミラノと同じような商人達の拒絶的態度に接したので、マトホイスは当時アドリア海の女王とさえいわれたヨーロッパ商業の中心地ヴェニス

12) Musterbuchhaltung, [Blatt 6 b] Vgl. Alfred Weitnauer, a.a.O., S. 176.

13) Musterbuchhaltung, [Blatt 11 a] Vgl. Alfred Weitnauer, a.a.O., S. 183.

14) Musterbuchhaltung, [Blatt 11 a] Vgl. Alfred Weitnauer, a.a.O., S. 183.

へと移っていった。マトホイスがイタリア遊学中に1番永く滞在した都市は、ヴェニスであったと思われる。

三

ヴェニスでのマトホイスの住居は、リアルト橋のそばにあつて運河に面した「ドイツ商館」(Fondaco dei Tedeschi)であつたはずである。当時のヴェニスは、近東へ輸出するためのヨーロッパの産物を各地から集める陸上貿易と、ヨーロッパ全土に売りさばく商品を近東から輸入する海上貿易を行う、ヨーロッパ最大の商業都市であつた。これら陸上貿易と海上貿易を比べると、後者の利益が大であつたため、ヴェニスの商人達が海上貿易を独占し、利益の比較的小ない陸上貿易を他国の商人に行かせていたのである。このためヴェニス市当局も地元商人を擁護する目的で、外国商人の海上貿易への進出を阻止する政策をとつたが、その1つとして、ドイツ商人がドイツ商館以外に住んで営業活動を行うことを禁じていたのである¹⁵⁾。のちにマトホイスが雇われたヤコブ・フッカー(Jacob Fugger)も、若い時ヴェニスに遊学し、このドイツ商館に滞在したことがあつた。

ドイツ商館が最初に建てられたのは、1200年ごろであつたが、1318年に1度、さらに1505年にもう1度それぞれ火災に会い¹⁶⁾、マトホイスが行つたのは、新しく建て替えられて10年ほどたった時であつた。当時の建物は中庭のある2階建てで、各階の内側に柱廊があり、56の部屋といくつかの地下倉庫、食堂、台所、酒場、管理人室に分かれていたが、内部には戸棚、荷物箱、棚といったものが所せましと置かれていて、中庭も見通せなかったほどに雑然としていたといわれている¹⁷⁾。ドイツ商館では、毎年2人の責任者がきめられていた

15) 小島男佐夫著、『簿記史論考』森山書店、昭39年、151～152頁。

16) Henry Simonsfeld, *Der Fondaco dei Tedeschi in Venedig und die Deutsch-Venetianischen Handelsbeziehungen. Quellen und Forschungen*, Stuttgart, 1887, S. 8～9.

17) Henry Simonsfeld, a.a.O., S. 10～11. 現在残っているドイツ商館の建物は4階建てであるが、当時は2階建てであつた。

が、マトホイスが滞在したと思われる1515年と1516年の責任者は、アウグスブルクのヨハン・ラウギンガー (Johann Lauginger) とニュールンベルクの人と考えられるウルリッヒ・マイヤー (Ulrich Mayer) であった¹⁸⁾。

マトホイスは、このドイツ商館から簿記を習いに通ったのであろうが、かれのついた教師は、当時のヴェニスでは有名であったアントニオ・マリアフィオール (Antonio Mariafior) であった¹⁹⁾。そしてマリアフィオールから、「最後には、わたしはかれがあまり勉強していないと感じた」 (Doch im außkeren befand ich, das er auch seicht gelert was)²⁰⁾ ほどまでに、マトホイスは簿記を学んだのである。このような簿記の習得を終おえて、マトホイスがアウグスブルクへ帰ったのは、1516年9月のことであった²¹⁾。

帰国して間もない10月1日に、マトホイスはフッガー家に簿記係の見習として雇われることになる²²⁾。シュバルツ家の家業を継がずにフッガー家の雇人となる道を選んだのが、あくまでも修業のためであって一時的のつもりであったのか、それとも雇われる時点ですでに家業を継ぐ考えをすて、フッガー家こそ将来を託するのに十分な商家と判断していたのかは、明らかでない。しかしこのフッガー家に見習としてでも雇われ、当主ヤコブと出会ったことが、マトホイスの一生を決定づける結果となった。

当時、フッガー家の当主ヤコブは57歳であったが、1日に16時間も働くという猛烈振りであった。そのため、健康には心配なかったものの、できれば自分の行っている日常的仕事をまかせうような人物を雇いたいと考えていたのである。丁度その時、たまたま見習として入ってきたのが、ヴェニス帰りで知

18) *Liste der Consuln der deutschen Kaufmannschaft im Fondaco* (1492~1753) (Vgl. Henry Simonsfeld, a.a.O., S. 207).

19) シュバルツ自身が書いたところによると Anthonius Mariafior であるが、これは古い書き方である。またペンドルフはマリア・フィオール (Maria Foir) と書き、Antonio をつけていない。Vgl. M. Schwarz, *Musterbuchhaltung*, [Blatt 11a] (Alfred Weitnauer, a.a.O., 183); B. Penndorf, a.a.O., S. 38.

20) *Musterbuchhaltung*, [Blatt 11a]. Vgl. Alfred Weitnauer, a.a.O., S. 183.

21) B. Penndorf, a.a.O., S. 48.

22) Alfred Weitnauer, a.a.O., S. 6.

性・器用さ・行動力を持つ19歳のマトホイスであったわけである²³⁾。マトホイスが正式に雇われたのは、1517年1月5日のことである²⁴⁾。それから1550年に隠退するまでの33年間、かれは当時「黄金の帳場」(goldenen Schreibstube)といわれ旅人の目を見はらせたフッガー家のアウグスブルクはリンダーマルクト(Rindermarkt)の本店で、会計主任(Hauptbuchhalter)としてヤコブとアントン(Anton Fugger)の2代につかえたのである²⁵⁾。かれの仕事の内容は、各地の支店から送られてくる計算書と営業帳簿をみて、各支店の業務を管理するというものであったが、フッガー一家内部での地位は、法律専門家であるマンゴルト(Anton Mangolt)と並ぶ、いわば大番頭であった²⁶⁾。

四

もともと自分の才智には自信をもち、ヴェニスで、師のマリアフィオールがあまり勉強をしていないと感じるほどまでに簿記を勉強したのであるから、フッガー家に雇われた時点でのマトホイスは、自分が簿記だけは十分に理解しているものと確信していたに違いない。しかし、フッガー家で最初に思い知らされたのは、自分が簿記をほとんど知らないか全く知らないということであった。このことを、のちに自分自身でマトホイスは、つぎのように書いている。「だれもが、わたくしのことを尊敬に値するものだと思っていた。しかし事實は、自分がわずかしかまたは全くといっていいほど簿記を知らないと感じる結果となった。わたくしはいやになり、自分を恥じた。」(Da vermainet jeder-man ich were das magnificat. Da es aber zu der prob kam vnd in das thon, da empfand ich, das ich ein wenig mer kundt, werder gar nichts. Das verdroß mich im hertzen vnnd schambt mich vor mir selbst.)²⁷⁾

23) Günter Ogger, a.a.O., S. 208.

24) Alfred Weitnauer, a.a.O., S. 6.

25) Alfred Weitnauer, a.a.O., S. 6; Hermann Kellenberg, Nürnberger Handel um 1540 (in, *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg*, Band 50) S. 299.

26) B. Penndorf, a.a.O., S. 47.

27) Musterbuchhaltung, [Blatt 11 a]. Vgl. Alfred Weinauer, a.a.O., S. 184.

才智に自信をもっていたマトホイスにとって、自分の学んだ簿記がフッガー家で役立たないと知ったときのショックは、非常に大きいものであったと思われる。

ただマトホイスが自分の簿記の力が不十分であると表現したことは、いろいろに考えることができる。1つは、言葉通りに、かれの勉強が全く不十分であったとか、勉強したとしても、それがフッガー家の簿記を理解するには未だ程度の低いものでしかなかったと考えることである。この考えは、フッガー家で実際に用いられていた簿記が、ヴェニスで用いられかつ教えられていた簿記よりも優れていたという結論にも通じることになる。しかし、このように考えることには、一般にいわれている当時のヴェニスとアウグスブルクの文化・商業レベルの格差を考慮した場合、不自然な感じが残る。マリアフィオールは、ヴェニスでは有名な簿記の教師であったといわれているのであるから、当時としては最高レベルの簿記までを教えたはずである。そのような教師のもとにあって、教師を批判しうるまでに勉強したものが、たとえ日の出の勢のフッガー家であったにしろ、そこで用いられている簿記が全く理解できなかったと考えることには、無理があるのではなかろうか。むしろ、ヴェニスではパチオリ(Luca Pacioli)に見られるごとく、主人でもある1商人が自ら行った取引を自らの手で記帳するための簿記が主流を占め、したがってマトホイスがマリアフィオールから習った簿記もその種のものであったと考え、フッガー家では、一説によると約80といわれるほどの多くの支店を有した関係上²⁸⁾、本店と支店または支店相互の債権・債務の発生・消滅を記帳することの多い簿記を用いていた点に、着目すべきではなかろうか。そうすると、フッガー家の簿記がマトホイスがヴェニスで習った簿記と少し違っていることに、かれ自身わずかな戸惑いを感じ、前述の表現をもってそのことを示したと結論することも可能になる。

エルビング写本の(Blatt 5a)の記述が正しいとすると、マトホイスは、フ

28) Götz Freiherrn von Pölnitz, *Jacob Fugger: Quellen und Erläuterungen*, Tübingen, 1951, 巻末図。

ッガー家に見習として雇われた10月1日から年末までの3カ月間に、フッガー家のヴェニス支店の立場に立って本店および他支店との取引を記帳する例示を含む、かれの最初の簿記書を書いたことになる²⁹⁾。しかし、約2年間にわたってイタリア各地で簿記を勉強しても理解できなかったフッガー家の簿記法が、たとえアウグスブルクで一生懸命に勉強したといっても、2・3カ月で、しかも全く簿記を知らなかった段階からはじめて著書にまとめうるレベルまで、そんなに早くマスターできるものであろうか。2・3カ月の間に、初歩からはじめて、フッガー家の簿記法を一応マスターしたと考えることこそ、無理なのはなかろうか。そうだとすると、マトホイスが「わずかしまたは全くといっていいほど簿記を知らないと感じ」たと表現したことに、誇張があることになる。もしエルビング写本の記述を正しいとすれば、実際は、イタリアでの勉強で十分に簿記の基礎、さらにフッガー家の簿記とは若干違った性質の簿記を理解しており、それだからこそ、少しばかり違ったフッガー家の簿記法が、比較的短期間にマスターできたと考えざるをえなくなるのではなかろうか。

五

前述のごとく、シュバルツは、フッガー家に雇われて間もない1516年と1518年、さらに隠退した年の1550年に、それぞれ一冊ずつの簿記書を書いたといわれている。それらはすべてが手書きで、印刷されたことはなかった。原本はすでに失われたものと信じられており、どのような大きさの紙にどのような文字で書かれていたのか、3冊が1つにとじられていたのか否かは不明である。われわれにとって幸せであったのは、写本が存在したことである。

シュバルツ簿記書に写本の存在することを、最初に確認したのは、ペンドルフであった。1913年のことである³⁰⁾。かれの調べによると、当時、エルビング市立図書館 (Stadtbibliothek Elbing)、ウィーン宮廷図書館 (Hofbibliothek Wien) およびダンヒッチ市立図書館 (Stadtbibliothek Danzig) に、それぞ

29) Vgl. Alfred Weitnauer, a.a.O., S. 174.

30) B. Penndorf, a.a.O., S. 48.

れ1冊ずつのシュバルツ簿記書の写本が存在していた。その後1920年に、ウィーン宮廷図書館の写本は、オーストリア国立図書館 (Österreichische Nationalbibliothek) へ移管されたといわれているが³¹⁾、1931年のヴァイトナーの研究では3冊の写本が比較検討されていることからして、この時点でも、3冊の写本は存在していたものと考えられる。ヴァイトナーが翻刻するにあたって主としてエルビング写本を用いたのは、それが比較的鮮明であったためと考えられている³²⁾。

第2次世界大戦を終えた今日、それら写本の存在が懸念されるところであるが、井上清教授の各図書館への問合せに対して、ウィーンの図書館からは見当らない旨の返信があったものの、ダンチッヒとエルビングの各図書館からは返信がないままであるという³³⁾。

シュバルツが、どのような目的をもってこれらの簿記書を著したかは、1516年と1518年の場合と、1550年の場合とを分けて考えねばならない。1516年と1518年の簿記書をどのような目的をもって書いたかは、つぎのかれ自身の言葉から知ることができる。「この本をわたくしは、自分がどんな人間であったかを年老いた時に思い出すために、青春の記念として書いた。」(Vnd dises buch hab ich mir allain zu ainer gedechtnus meiner jugendt gemacht, im alter zusehen, was ich für ein gauggler sey gewesen.)³⁴⁾ この言葉の裏にあるシュバルツの願望を、1551年になされたエルビング写本の筆者は、「かれは後につづく若人達を愛し、共に分かちあわんとした」(Das er dann hernach andern nachkommenden jugent auch zu lieb vnd tail hat lassen werden.)³⁵⁾ のだと解し、ハートソウはまた、1つには自分が新しい地位を得たことを誇るため、他の1つは、自分の身につけた技術を誇るためであろうと解している³⁶⁾。シュバルツが自信家であり、才智を隠すようなことはしなかった人であ

31) 井上清稿, 「シュヴァルツの簿記法」(二)『会計』第110巻, 第1号, 131頁。

32) B. Penndorf, a.a.O., S. 48.

33) 井上清稿, 前掲論文(二), 131頁。

34) Musterbuchhaltung, [Blatt 11 b]. Vgl. Alfred Weitnauer, a.a.O., S. 184.

35) Alfred Weitnauer, a.a.O., S. 174.

ったといわれることからすると、ハートソウの解釈はありうるように思われる。

1550年に書いたのが、その年の4月17日に訪れたマイール (Conradt Mair) の依頼によるものであることは、シュバルツ自身の記述から明らかである³⁷⁾。

シュバルツの簿記書が、なぜ印刷されなかったかについては、ハートソウによってつぎの2つの解釈がなされている³⁸⁾。

1つは、丁度シュバルツが2冊目の簿記書を書いた1518年に、グラマティウス (Heinrich Grammateus) の簿記書 *Rechenbüchlein künstlich, behend und gewiss auff alle Kaufmanschafft gericht* が登場したと結びつけるものである³⁹⁾。すなわち、グラマティウスの簿記書は、アラビア数字を用いて計算板で計算する方法が例示され、複式簿記の技法が簡潔にのべられているといった、簡単は手引き書であった。それに対してシュバルツの本の場合は、簿記について一応は勉強したことのある人を対象とした、複式簿記についてのより完全な説明書であり、それだけに比較的むずかしい内容を持つものであったからだというのである。ハートソウの説明はここでおわるのであるが、この解釈によると、採算が意識されていたことになる。

他の1つは、印刷することにヤコブが反対したであろうとするものである。すなわち、1516年と1518年に書かれたシュバルツの簿記書は、フッガー家のヴェニス支店の立場から書かれており、ヴェニス支店の営業情報が生のままで用いられている⁴⁰⁾。したがって、もしその簿記書を印刷して広く流布させることになる、フッガー家の内情の1部が外部に漏れる結果となる。したがってこの点を、ヤコブが懸念したのであると考えるものである。

これら2つの理由のうちでは、2番目の解釈がより現実味があり、説得力も

36) Mildred L. Hartsough, *op. cit.*, p. 543.

37) Musterbuchhaltung, [Blatt 78 a]. Vgl. Alfred Weitnauer, a.a.O., S. 272.

38) Mildred L. Hartsough, *op. cit.*, p. 543.

39) グラマティウスの本が印刷されたのは、1521年であるが、それはニュールンベルクに於いてであった。

40) シュバルツ簿記書の内容については、拙稿、「シュバルツの簿記書について」(『青山経営論集』第9巻、第2・3合併号、111頁以下)等を参照されたい。

あるように思われる。フッガー家の内情の1部であっても世間に知れることをきらったという点では、ヤコブのあとを継いだ甥のアントン (Anton Fugger) も同じであったのであろう。最初の写本が1551年に作成されたことが⁴¹⁾、そのことを反映しているもののように思われる。1551年には、ヤコブはもちろんアントンも亡く、しかもシュバルツ自身がフッガー家より身を引いた後なのである。

第1のグラマティウスと関係ずける解釈では、最初の部分が1516年に書かれたとすると、それが印刷されなかった理由を説明できない。ただ採算だけは、常に考慮されていたであろう。

六

フッガー家に雇われたシュバルツは、リンダーマルクトの本店でだけ仕事をしていたというのではなかった。1520年にはすでにフランクフルトのメッセへと赴いている⁴²⁾。また1523年には、カール皇帝に会うためにニュールンベルクへ、1525年には、現金輸送の任務をおびてインスブルック、シュワルツ、ハール、ラッテンベルクへ旅行したようである⁴³⁾。その後も、数多くの旅行をしたのであろう。

父親を亡くしたのは1519年であったが、父はマトホイスに多くの遺産を残した。この遺産の使い道の1つとしてマトホイスの考えたのは、移りゆく服装の様子を絵に描き、本として残すということであった⁴⁴⁾。かれが服装の本を作成せんとしたのは、かれの衣裳への関心の強さとかれに絵心のあったことを示しているといえよう。

41) エルビング写本が1551年、ウィン写本が1553年、ダンチッヒ写本が1564年に、それぞれ作成された。(B. Penndorf, a.a.O., S. 48)

42) B. Penndorf, "Matthäus Schwarz der „Fürneme," Hauptbuchhalter der Fugger" (in, *Der Kaufmann und das Leben, Beiblatt zur Zeitschrift für Handelswissenschaft und Handelspraxis*, Nov. 1912, No. 8) S. 117.

43) 井上清稿, 前掲論文(一) 140~141頁。

44) B. Penndorf, "Matthäus Schwarz, der „Fürneme," Hauptbuchhalter der Fuggers, S. 116.

マトホイスはおしゃれで、しかもそれはいささか度が過ぎたものであったようである。有名なフッガー家の研究家ポエルニッツ (Götz Freiherrn von Pölnitz) は、1540年のカラブリーンのフッガー家の鉱山業について述べるにさいし、マトホイスを「ヤコブ・フッガーの上品な帳簿係でアウグスブルク人の着道楽者マトホイス・シュバルツ」(dem Vornehmen Buchhalter Jakob Fugger und Augsburger Kleidernarren, Matthäus Schwarz) と表現したほどである⁴⁵⁾。

マトホイスは、絵を描くという面で、すぐれた腕をもっていたといわれている。イタリアへ遊学する以前の1時期には、画家か彫刻家になることを真剣に考えたとさえいわれているほどである⁴⁶⁾。そのマトホイスがルネッサンスの中心地北イタリアへ赴きながら、画家や彫刻家になる勉強をせず、商人となるべく勉強をしたのは、かれの兄弟の中にすでに芸術家への途を進みつつあるものがあったために、父親がマトホイスには家業を継ぐことを望んだためといわれている⁴⁷⁾。

マトホイスは、イタリア遊学へ出発した年の1514年から、絵を描きはじめている⁴⁸⁾。おそらく、イタリア遊学中の思い出とするために、絵日記をつけはじめたのであろう。この絵をもとに遺産を受継いだかれは、衣裳に関する本を仕上げることを決心したのである。したがって、この本の絵はマトホイスと思われる人物を中心にすえたものとなっているが、16センチ×10センチの大きさだといわれている⁴⁹⁾。絵は全部で137枚含まれているが、衣裳は時代と風俗を忠実に示すように描かれているという。ただこの衣裳本は、マトホイス自身がすべて筆をとり自分で描いたとは、必ずしもいえない。下絵としてマトホイスが描いていた絵日記が使用されているのは確かなようであるが、ペンドルフは

45) Götz Freiherrn von Pölnitz, *Anton Fugger*, Band 2, Tübingen, 1963, S. 152.

46) Günter Ogger, a.a.O., S. 208.

47) 井上清稿, 前掲論文(一), 138頁。

48) B. Penndorf, "Matthäus Schwarz, der „Fürneme“, *Hauptbuchhalter der Fugger*, S. 116.

49) 井上清稿, 前掲論文(二), 128頁。

「それは、名の知れない美術家の手によって不朽のものとされた」(hat er sich durch die Hand unbekannter Künstler verewigen lassen) とのべ、衣裳本自体は少なくともマトホイスの手によるものでないことを指摘している⁵⁰⁾。

この本は、マトホイスを体内にやどした母親の絵(第1図)にはじまり、アントン・フッガーの告別式に参列したときの、長くすそを引いた黒の葬式用外套のマトホイスの絵(第137図)におわっているが、第40図までがかれの青年時代までのものである。

マトホイスの子ヴァイト・コンラッド(Veit Konrad)も、父にならって41枚の絵からなる同種の衣裳に関する本を作成したが、これまでにマトホイス・シュバルツとヴァイト・コンラッド・シュバルツの名を有名にしたのは、この衣裳本のためであった面もある。風俗史研究家の側では、早くから貴重な資料として、このシュバルツ親子の本は注目されていたようである。

マトホイスが結婚したのは1538年5月1日で、相手は同じくフッガー家に雇われていた法律専門家アントン・マンゴルトの娘バーバラであった。マトホイス41歳、バーバラ30歳の時である。そして、1539年に長男ウルリッヒが、ついで1541年に前述のヴァイト・コンラッドが、そして1543年に長女バーバラ・スグネスが生まれている。ウルリッヒとヴァイト・コンラッドは、若くしてイタリアへ遊学したが、その後ともにフッガー家に雇われた⁵¹⁾。

アムベルガー(Christoph Amberger)の手になる肖像画によると⁵²⁾、中年のマトホイスは、あご髭をたくわえた鼻の大きな肥満体であるが、1547年12月19日に脳溢血で倒れた。その後の回復には3年あまりの歳月を要したようであるが、その間湯治のために、有名なバーデン地方の温泉地バーデン・バーデン(Baden-Baden)へも行っている。

1560年にアントン・フッガーがこの世を去ったのを期に、マトホイスもフッ

50) B. Penndorf, "Matthäus Schwarz, der „Fürneme“, Hauptbuchhalter der Fugger, S. 116.

51) 井上清稿, 前掲論文(一), 146~148頁。

52) Götz Freiherrn von Pölnitz, *Anton Fugger*, nach Seite 32.

マトホイス・シュバルツ伝

ガー家を退くことにした。かれ63歳のときである。かれはその後も永生きし、77歳で1574年にアウグスブルクで死亡したが、正確な死亡月日は知られていない⁵³⁾。

53) 井上清稿，前掲論文（一），48～49頁。